社会的事象と自分の関わり方を選択・判断する力を育てる社会科授業づくり（第一年次）

―地域素材を活用した単元構想の工夫を通して―

長期研究員　菅 野　聡

《研究の要旨》

本研究は，小学校社会科において，社会的事象と自分の関わり方を選択・判断する力の育成を目指したものである。地域との関わりを意識して問題解決ができるように，地域素材を教材化した単元を構想した。この単元構想には，考えを広げ，深めることができる対話や自分と地域との関わりを考え，学んだことを発信する活動を位置付けた。その結果，地域との関わりを意識して学んだことを基に，自分の意見や考えをもつ児童の姿が見られた。

Ⅰ　研究の趣旨

小学校学習指導要領解説社会編では，社会科で育成する資質・能力である思考力，判断力，表現力等の一つに，「社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて，学習したことを基に，社会への関わり方を選択・判断する力」が示されている。また，「社会への関わり方を選択・判断する」とは，「社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で，習得した知識などの中から自分たちに協力できることなどを選び出し，自分の意見や考えとして決めるなどして，判断すること」と示されている。

これまでの自身の授業を振り返ると，教科書に書かれた事実を押さえることに精一杯で，事実同士を比較，関連付ける単元や授業を設計するには至らなかった。そのため，これからの社会の在り方や自分たちの社会への関わり方を考える場面を授業の中に設定しても，表面的な意見や考えが出されるだけにとどまっていた。また，児童が地域や社会との関わりを意識した授業を展開することができていなかったことも，表面的な授業にとどまっていた原因と考える。

本研究では，「習得した知識などの中から自分たちにできることなどを選び出し，自分の意見や考えをもつ力」を「社会的事象と自分の関わり方を選択・判断する力」と定義する。また，本研究では，地域素材を教材化した単元を構想する。児童にとって身近で，見たり，聞いたりしたことがある地域素材を教材化することで，地域との関わりを意識した問題解決ができるようにする。このような単元を構想することで，地域との関わりを意識して学び，学んだことを基に，自分の意見や考えをもつ児童の姿を目指し，主題に迫っていきたい。

Ⅱ　研究の概要

1　研究仮説

小学校社会科の授業において，以下の手立てを講じれば，社会的事象と自分の関わり方を選択・判断する力を育てることができるであろう。

【手立て１】地域との関わりを意識して問題解決ができる地域素材の教材化

【手立て２】地域素材を多様な視点から捉え，考えを広げ，深めることができる対話

【手立て３】自分と地域との関わりを考えるために，学んだことを発信する活動

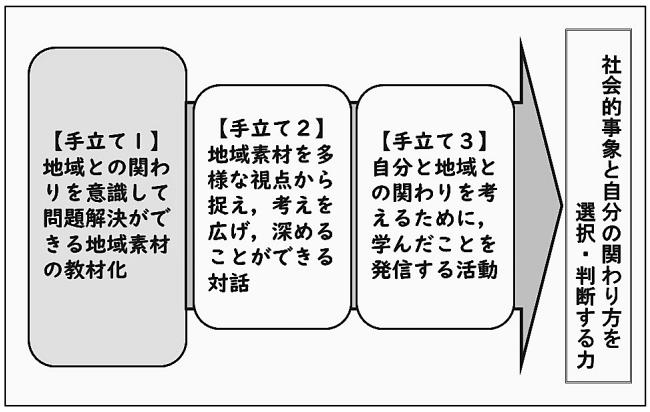


図１　研究のイメージ図

2　研究の内容

(1)【手立て１】地域との関わりを意識して問題解決ができる地域素材の教材化

児童が地域との関わりを意識して問題解決ができるように，単元を見通して，地域素材を教材化する。児童自ら，多くのことに気付いたり，問い※1を見いだしたりできるように，児童の認識にずれが生じるような資料を準備する。その際は，加工の仕方や提示の仕方を工夫する。また，単元の学習が進むにつれて，児童が地域との関わりを意識した問いを見いだせるように資料の配列を工夫する。

※１　本研究における問いとは，「調べたり，考えたりする事項を示唆し学習の方向を導くものであり，児童の疑問などを含むもの」とする。

(2)【手立て２】地域素材を多様な視点から捉え，考え

を広げ，深めることができる対話

児童が自分たちの考えを広げ，深められるように，教材化した地域素材を多様な視点から捉えさせる対話を単元の中に位置付ける。児童が学んできたことを基に，互いの考えを比較したり，関連付けたりできるように，年表などを作成して，それらを基に話し合う。対話を通して知ることができた児童同士の多様な考えは，児童が選択・判断する場面で生かせるようにする。

(3)【手立て３】自分と地域との関わりを考えるために，学んだことを発信する活動

児童が自分と地域との関わりについて考えるために，学んだことを発信する活動を単元の終盤に位置付ける。発信する活動は，「自分たちにできることはどんなことか」などと自分の学びを整理することにもつながる。学んだことを基にした自分の考えを，ポスターに描いたり，提案文を書いたりして発信させる。

３　研究の実際

対象学年	第３学年１組27名（１学級）
授業実践Ⅰ	「農家の仕事」（11時間）
授業実践Ⅱ	「市の様子と人々のくらしのうつりかわり」（11時間）

本稿では，授業実践Ⅱの実際を中心に述べる。

(1)【手立て１】について

児童と社会的事象の出会いとなる場面では，実際に見たり聞いたりしたことがある社会的事象に新たな事実を加えて提示することで，児童が自分の認識にずれを感じ，問いを見いだせるようにした。

第１時では，白河駅前の３枚の写真を提示した。まずは現在の写真を提示し，その後，30年前，70年前と提示していった。児童が見たり，聞いたりしたことがある現在の白河駅と過去の白河駅の様子を自然に比較できるようにするためである。児童からは様々な気付きが出されたが，１時目は，「駅の周り以外の場所も変わっているのか」という問いと「地図を比べてみたい」という思いをもって終えた（**図２**）。

図２　白河駅前の移り変わり

第２時は，現在と70年前の地図を比較し，気付いたことや問いをノートに書かせ，自由に発表させた（**図３**）。白河第一小学校の場所が70年前と今とで違っていたり，道路の数が多くなっていたりすることに気付いた児童の発言を板書して，考えを整理していった。そして，これからどんなことを調べていきたいか問うこと

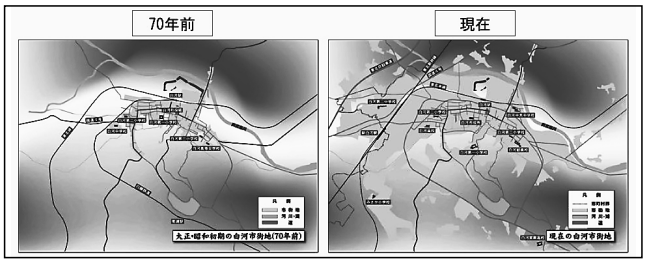


図３　白河市中心部の移り変わり

で，「白河市は，いつごろ，どのように変わったのか」という問いをつくった。さらに，児童の発言を，交通，土地の使われ方，人口，公共施設，昔の道具の移り変わりに分類し，それらを１単位時間ごとの問いをつくる際の視点にした（**図４**）。

図４　五つの視点

第３時から第７時までは，五つの視点を振り返り，問いについて調べたり，話し合ったり，まとめたりする活動を行った。地図やグラフ，表，年表などの資料は，いつでも見られるようにした。すると，その時間に配付した資料だけでなく，前の時間の資料も見ながら考える児童の姿が見られた。第４時は，白河市の土地の使われ方の移り変わりについて調べた。「未来はもっと森林が減るかもしれない」とこれから先のことを考える児童がいた。また，第５時は，白河市の人口の移り変わりについて調べた。「これから先の人口はどうなるのだろう」とこれから先のことを考える問いが生まれた。この問いは，第10時の問いである「これからの白河市はどのように変わっていくとよいのだろう」につなげていった。

第11時では，白河市の移り変わりについて学習した際に用いた視点で，明石市の移り変わりについて調べた。児童は，前時までに経験した学び方を生かして，市の移り変わりにつながる要因について調べ，考えることができた。また，明石市について調べていく中で，白河市と明石市の共通点に気付く児童が見られた。さらに，学習内容をまとめる段階になると，「白河市，明石市だけでなく，他の市も同じように移り変わっているのではないか」という発言があった（**図５**）。

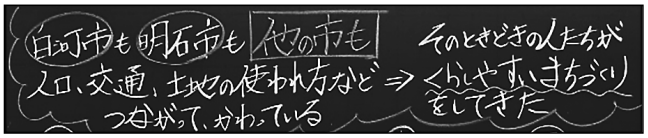


図５　第11時のまとめに向かう板書

このように，同じ場所の時間の経過による違いや自分が住む地域と他地域の特徴を比較することで，様々なことに気付いたり，問いを見いだしたりすることができた。また，単元の学習が進むにつれて，市のこれからについて考える新たな問いが見いだされるなど，問いがつながっていった。

(2)【手立て２】について

第８時は，交通，土地の使われ方，人口，公共施設，昔の道具の移り変わりに着目して調べてきた内容を児童一人一人が年表にまとめた（**図６**）。年表にまとめることで，調べてきた内容について整理し直すことができた。

	70年ほど前	30年ほど前	今
駅前の様子	人が歩いている(歩いていどう)	道路ができ駅前は、車でいっぱいになっている	今は、白河馬前はすごくにぎやか。
交通	東北本線、白棚鉄道が通っている道路がすくない	東北自動車道(70年ほど前に)ができて道路が多くなった	10年ほど前より道路が広くなった。
土地の使われ方	森林が多い 駅(白河馬)の周りに家や店がすくない	白河市に大きな工場ができてきて、畑は、70年ほど前より住宅ぐらい大きくなった	大きな工場がとの戸建ありと、30年ほど前よりもっと住宅ぐらい家がふえた。
人口	約4万人(ほぼ今と同じ)	約5万人(70年前よりすこし多い)	約6万人(6万人ちょうど)
公共しせつ	学校の数が少ない(小学校3つ) 役場が白河駅の目の前にある(駅のすぐ前がある)	今と同じ。(白河駅の南に市役所、郵便局ができている)	道路が多くなり、市役所もふえた。
くらしの道具	布おむ 電気ぞうきんかい 道具(ほうきなどつい) (ハ) ガスファ、ほうたくぼう	30年前エアコンがスココロ 三角形だったこ この形	エアコンがクーリングヒーター ガスそうこのかいたくたこ はいた り 音楽プレーヤー
分かったこと・気づいたこと	・今から見るとふべんな生活。(昔の人にとってはべんり) ・人口が少ないから、道路、家が少ない。	・30年前は、ほとんど今と同じ生活。 ・70年前より少し人口がふえて、道路、家がいっぱいふえた。	今はとても楽に住める。 ・人口がふえて、家が多くなった。

図６　児童がまとめた年表

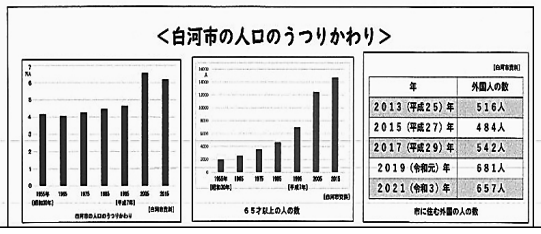
第９時は，第８時でまとめた年表を基に，「白河市は，いつごろ，どのように変わったのか」という問いの答えを話し合うこととした。問いの答えを見付けるときは，数名の児童が年表の分かったこと・気付いたことの欄に記入した「人口が増えて，家が多くなった」などの考えに注目させた。調べたことを年表の横軸に沿ってまとめてきたが，本時では，時期ごとに年表を縦に見て，事実同士のつながりを見付けていけるようにした。全体の対話では，初め，「人口や道路や家がたくさん増えた」「人口がさらに増えたから，公共施設が増えた」などという考えが出された。人口の増減によって交通や土地利用の変化が起きているという考えである。しかし，対話の後半になると，「東北自動車道など道路が増えたから，人口が増えた」という考えも出てきた。交通が便利になることで，人口が増加したのではないかという前述とは逆の発想から生まれた考えである。また，対話の中で，「歩いて移動するから，鉄道が通っている」と発言した児童がいた。この発言の内容について，どうしてつながっているのか，また，どの資料から分かるのかを学級全体に問い返した。すると，「白棚鉄道が通っていた70年前の交通の地図に着目したのではないか」と他の児童たちが予想した。その後，その児童は，その地図と70年前の白河駅前の写真を見て考えたことを発言した。このときの対話は，友達の考えの根拠となった資料について，理解しようとしている学びの姿だったと考える。児童は，対話を通して，資料を基に，互いの考えを比較，関連付け，類似点や相違点を見付けることができた。このような対話は，他の単元の学習においても，社会的事象についての様々な捉えにつなげることができる学び方であった。

(3)【手立て３】について

第10時では，白河市のまちづくりの理念を紹介し，「これからの白河市はこうなってほしい」という児童一人一人の願いを提案文に書いた。提案文を書くために，交通，土地の使われ方，人口，公共施設の移り変わりの資料を参考にすることで，学んだことの中から自分の考えをもって文を書けるようにした。人口を選んだ児童Ａは，高齢化や国際化に触れながら白河市の発展について自分の意見をもつことができた（**図７**）。また，振り返りシートに，「提案文を書いて，白河市のことをもっと知れた」と記述した児童もおり，提案文を書くことは，学んだことを基に，自分の考えを整理することに効果的だった。

ていあん文

わたしは、だれでも安全にすめる町づくりをていあんします。
理由は、グラフのとおり、外国人や高れい者がふえているからです。どんな人でも安全で住みやすい白河市になってほしいです。



年	外国人の数
2013（平成25）年	516人
2015（平成27）年	484人
2017（平成29）年	542人
2019（令和元）年	681人
2021（令和3）年	657人

図７　児童Ａの提案文

Ⅲ　研究のまとめ

１　研究の分析

(1) 児童Ｂの振り返りと提案文の記述から

児童Ｂは，３時目の交通の移り変わりの学習後，「道路が増えてまちが便利になった」と振り返った。また，４時目の土地の使われ方の移り変わりの学習後は，「まちに森林が増えてほしい」と振り返った。そして，「森林を少しずつ増やしながら工場などを増やすこと」と提

案文に書いた（**図８**）。提案文からは，先人が利便性を求めてまちを発展させてきたことに共感しつつも，これからは自然も大切にしていきたいという願いが読み取れる。児童Ｂの姿は，単元の学習を進める中で，３年生なりに，白河市のこれまでと今を比較したり，関連付けたりすることで，これからは何が大切になるか，考えることができた姿であったと考える。それも，単元を通して地域素材を教材化することで，地域との関わりを意識して問題解決してきたからだと考える。

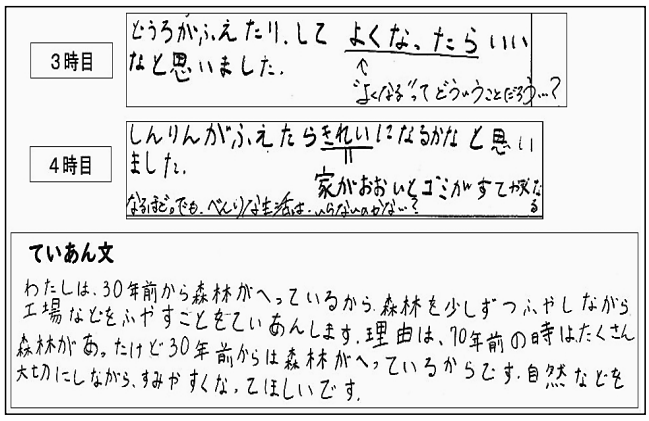


図８　児童Ｂの振り返りと提案文の記述内容

(2) 事後テストの記述内容，事前・事後テストの視点の数の変容から

四つの資料から，まちがよりよくなっているかを考える事前・事後テストを実施した。事前・事後ともに同じ問題を解いた。いくつの視点が書かれているかを見る評価規準を作成し，事前・事後テストの記述を分析した（**図９**）。

評価	記述の内容
A	学んだ事実の中から，複数の視点をもって，発展について考えている。
B	学んだ事実の中から，一つの視点をもって，発展について考えている。
C	学んだ事実以外の中から，発展について考えている。

図９　評価規準

児童Ｃの事後テストの記述内容に着目すると，五つの視点で記述している（**図10**）。児童Ｃは，対話での発言こそ少なかったが，資料に気付いたことを進んでメモするなどしていた児童である。児童Ｃのように他の児童の対話を聞くことで，自分の学びを深めていくことができた児童もいた。また，学級全体でも，事後テストでＡ評価となった児童が増えた（**図11**）。事後テストの記述内容や事前・事後テストでの視点の数の変容からは，単元の学びの中で，対話をしたり，その対話を聞いたりしたことで，児童一人一人が，社会的事象と自分の関わり方を選択・判断する際の視点の数を増やしていったと考える。

上の地図の交通は，新かん線ができて，どうろもできてよくなったと思います。（中略）うつりかわりはよくなったと思います。理由は，家や店がふえてほどよいくらいの森林をのこしているから（中略）ケアプラザがいっぱいあるからです。

図10　児童Ｃの事後テストの記述

（人）	A	B	C
事前テスト（学習前）	8	5	14
事後テスト（学習後）	24	2	0

図11　テスト結果の変容

(3) 提案文の記述内容から

児童Ｄは，学んだことの中から，交通を選び，道路や土地の使われ方に着目した提案文を書いている（**図12**）。児童Ｄは，第３時の交通の移り変わりの学習内容や第４時の土地の使われ方の移り変わりの学習内容を関連付けて提案文を書いたと考える。また，児童Ｄは，第６時に公共施設の移り変わりについて学習していたとき，南の方に住宅地が増えたことに気付き，発言していた。そのことは，学んできた市の様子の変化と市でくらす人々の生活の様子を結び付けて提案文を書くことに生かされたと考える。この児童Ｄの姿は，単元を通して学んだことを関連付けて，市のこれからについて意見をもつことができた姿と考える。

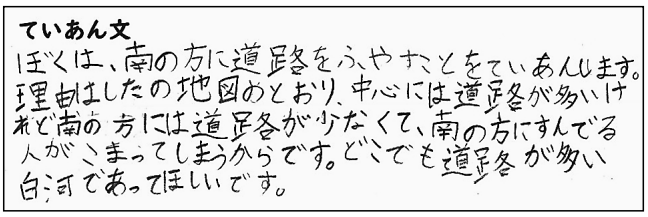


図12　児童Ｄの提案文の記述内容

２　成果と課題

(1) 研究の成果

社会的事象と自分の関わり方を選択・判断する力を育成する上で必要な学び方を経験できた。地域素材を教材化した単元を通した学びによって，児童は，社会的事象を捉える際に視点をもって考えることができた。また，事実同士を比較したり，関連付けたりすることもできた。これらは，今後，社会科の学習を進めていく中で大切な力になっていくと考える。

(2) 研究の課題

社会的事象と自分の関わり方を選択・判断する際には，自分事として考えることができるようにさせていきたい。そのためには，問いに対する予想をもたせる活動を大切にしたい。自分の予想が正しいかどうか，学習を通して得た知識を基に確かめていくが，さらに，対話によって，より確かなものになったり，別の考えに変わったりするはずである。このような学習過程を通して学んだことを基に，社会的事象と自分の関わり方を選択・判断できるようにさせたい。また，児童が，社会的事象と自分の関わり方を選択・判断する際には，目的意識をもたせることも必要である。児童が必要感のある問いを見いだせるように，教材のさらなる開発を行っていく。